

有の悲しみ—ジョンソン『スウィフト伝』について⁽¹⁾

西 山 徹

1. はじめに一詩人になりそこなった詩人の伝記

『最も著名なイギリス詩人の伝記集』(*The Lives of the Most Eminent English Poets*, 1779-81) (以後『詩人伝』と略) の中に収められた伝記としては奇妙なことに、『スウィフト伝』(*The Life of Swift*) においてサミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson, 1709-84) はジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) の個々の詩作品にほとんど触れない。少ない例外の一つはヴァネッサ (Vanessa) の愛称で知られるエスター・ヴァナムリ (Esther Vanhomrigh, 1688-1723) との関係を描いた詩『カデナスとヴァネッサ』(*Cadenus and Vanessa*) への言及であるが、この詩は、スウィフトと二人の女性、すなわちステラ (Stella: Esther Johnson, 1681-1728 の愛称) とヴァネッサとの三角関係を説明するために取り上げられるだけであり、詩自体の引用はない。そこで強調されるのは、ヴァネッサの遺言によってこの詩が出版され、スウィフトとヴァネッサの関係が世間に知れ渡った結果、スウィフトとステラが苦しむ様子である。『スウィフト伝』における『カデナスとヴァネッサ』についての叙述は、この作品を評価するためではなく、いわばスウィフトの業を描くためのものであると言ってよい。

スウィフトの詩人としての評価は、『スウィフト伝』の最初の方で 17 世紀末の文壇の大御所ジョン・ドライデン (John Dryden, 1631-1700) の口を借りて行なわれる。

スウィフトは若い頃から自分を詩人であると、あるいは詩人になりたいと考え始めていて、テンブル、国王、アテネ協会に捧げるピンダロス風頌詩を書いた。(中略) 聞いたところによると、これらの詩をじっくり読んだドライデンは、「スウィフト君、君は詩人にはなれないね」と言ったようだが、この通告のせいでスウィフトはドライデンに対する悪意を生涯持ち続けたという⁽²⁾。

(1) 本論文は 2008 年 5 月 26 日に広島県民文化センターで開催された日本ジョンソン協会大会シンポジウム「ジョンソンの『詩人伝』を読む—侵犯する伝記的／批評的ナラティヴ—」での発表原稿を基にして大幅に加筆修正したものである。本論文の基本的アイデアは父西山邦彦 (1930-2011) に負っている。

(2) Samuel Johnson, *The Lives of the Most Eminent English Poets, with Critical Observations on Their Works*, ed. Roger Lonsdale, 4 vols. (Oxford: Clarendon, 2006): 3: 191. 以後『詩人伝』の引用はこの版からとし、第 3 巻に収められた *The Life of Swift* からの引用の後にはページを、その他の部分からの引用の後には巻とページを記す。翻訳は筆者によるが、『イギリス詩人伝』小林章夫他訳 (筑摩書房, 2009 年) に収められた渡邊孔二訳を参考にした。

ジョンソンはここでいくぶん話を捻じ曲げている可能性がある。すでに指摘されているように、ドライデンは「詩人」と言ったのではなく、「ピンダロス風詩人」と言ったと初期の伝記作者たちは伝えているからである (Cook xx-xxii)。伝聞の形で書かれているものの、「スウィフト君、君は詩人にはなれないね」というドライデンが下した審判は、詩人としてのスウィフトに対する死刑宣告のように響く。そして『スウィフト伝』の最後でジョンソンはドライデンのこの言葉を裏書きするかのよう、「スウィフト博士の詩作品の中には批評家はその力を振るうべきものはあまりない」(214)と、凡庸の烙印を押してとどめを刺し、詩人スウィフトを葬り去るのである。このように「詩人になりそこなった男」の生涯を物語る『スウィフト伝』は、ジョンソンの『詩人伝』の中でも異色の存在であると言える。

では、『スウィフト伝』においてジョンソンが散文作品の批評に力を振るっているかというところ、そうでもなさそうである。例えば『桶物語』(*A Tale of a Tub*, 1704) については、称賛しつつも、他の作者の手によるものである可能性を匂わせて、スウィフトの作品群の中に位置づけようとしないうち、『書物戦争』(*The Battle of the Books*, 1704) の独創性は否定している。また『ガリヴァー旅行記』(*Gulliver's Travels*, 1726) に関しても、この本に対する世評をなぞった上で、最も面白くないのは第3部で、最もおどましいのは第4部だと言って済ますのみで、あまりにそっけない。『スウィフト伝』に見られるほとんど唯一のスウィフト作品からの引用は『キリスト教廃止に対する反論』(*An Argument Against Abolishing Christianity*, 1712) からのものであるが、これも先行する伝記であるディー・スウィフト (Deane Swift, 1707-83) による同じ部分の引用 (136-7) をそのままなぞっているだけで、ジョンソン独自の視点によって選び出されたものではない。『スウィフト伝』において、ジョンソンはスウィフトの作品を評価することに力を注いでいるとはいいがたく、おごなりの批評で済ませているという感がある。

ジョンソンの低い評価がスウィフトの詩の批評史に大きな影響を与えたことは間違いない。スウィフトの詩は取るに足らぬとするジョンソンの評は、この伝記に書き込まれたドライデンの言葉と相まって、スウィフトの詩は読む価値がないとする風潮を作ってしまったと言える。スウィフトの詩についての研究が本格的に行なわれるようになったのは20世紀の後半になってからであり、現代でもスウィフトの詩を論じる者は、「ジョンソンはこう言っている、がしかし」と書き出さなくてはならないのである。

『スウィフト伝』におけるこのような厳しい見方には、ジョンソンの個人的偏見が含まれているように見えることから、しばしば「不当」(unfair) であると評されてきた (Boswell 1112; Sheridan 495-512; Williams 128; Maner 331)。そのような「不当さ」の原因については、ジョンソンとスウィフトの気質の相容れない相違に帰する者もいれば (Raleigh 29; Korshin 464-78)、逆にあまりに似通っているせいであるとする者もある (Watkins 31; Grundy 161; 渡邊 171-200)。またその間を行く S. P. T. キーランの論文「ジョンソンの伝記とスウィフト的自己」(1994年) は「『スウィフト伝』に見られるジョンソンの反感は、スウィフトとの類似と非類似の間の揺れから生じる」(Keilen 327) と両方の説を統合するような論を展開している。

しかし、『スウィフト伝』は本当に不当なのだろうか。個人的偏見は隠せないにしても、この伝記において、作家スウィフトに対するジョンソンの全般的評価は決して低いわけではないのである。ジョンソンはスウィフトの詩を評価していないわけではなく、先ほどの引用に続く部分には「彼

の詩は皆、彼自身の考えるよい文体の定義を裏書きしており、適所適語からなっている」(214)と書かれていて、どちらかと言えば肯定的である。また、スウィフトの全般的文体についても、ジョンソンはその特徴を「流れるというよりは滴る」(208)という巧みな言葉で浮かび上がらせて、「意味を正確にわかりやすく伝えることを、スウィフトは目指したが、それを実現している点において、最高級の称賛ではないにしても、称賛に値する」(209)と条件付きながらも称賛している。『スウィフト伝』は、全般的にはスウィフトのプロの作家としての力量を認めていて、必ずしも「不当」であるとは言えないのである。

ジョンソンの目的が作品を取り上げてその評価を下すことではなかったとすれば、ジョンソンは『スウィフト伝』の中で一体何を見せたかったのだろうか。『スウィフト伝』は注文に応じて急いで書かれたずさんな仕事であるとする批評家（Korshin 466-68; Rawson 115）もいるが、作品評価以外のところにジョンソンの意図を探ることも可能であると思われる。『スウィフト伝』を編集・構成するジョンソンの仕事には一定の傾向が見て取れるからである。本稿の目的は、この傾向を明らかにすることによって、ジョンソン『スウィフト伝』の意図を探ることである。それを探るために、まずこの伝記の成り立ちを考えてみたい。

2. 『スウィフト伝』編集作業

ジョンソンは、先行する複数の伝記的文書を編集して自らの『スウィフト伝』を作り上げている。先行するスウィフトの伝記として特にジョンソンが意識していたのは、1755年のスウィフト全集の冒頭に付けられたジョン・ホークスワース（John Hawkesworth, c. 1715-73）による『ダブリン聖パトリック教会司祭長ジョナサン・スウィフト博士の生涯の記述』（*An Account of the Life of the Reverend Jonathan Swift, D. D. Dean of St. Patrick's, Dublin, 1755*）であった。ジョンソンは『スウィフト伝』冒頭でそのことに触れている。

スウィフト博士に関する記述は、友人のよしみで私が提案した計画にしたがって、ホークスワース博士がすでに非常に勤勉かつ正確にまとめている。したがって私は生涯について多くを語ることを期待されてはいまい。それについては品位ある言葉と感情の力によって話を立派なものにできる人にずっと前に私の考えを伝えたからである。(189)

この記述によれば、ホークスワースによる伝記にはすでにジョンソンの考えが反映されていることになる。実際、ジョンソンの『スウィフト伝』は、ホークスワースによるこの伝記の流れに段落単位でそのまま沿うような形で書かれていて、ほとんどホークスワースの文章をパラフレーズしているような部分も少なくない。トマス・シェリダン（Thomas Sheridan, 1719-88）によれば、ジョンソンはホークスワースの記述の「短い要約」（a short abstract）（Sheridan XV）を提供しているにすぎないのである。

ホークスワースによる伝記自体もまた、スウィフトの自伝的記述、オラリ伯爵ジョン・ボイル『ジョナサン・スウィフト博士の生涯と著作に関する評言』（John Boyle, Earl of Orrery, *Remarks on the Life and Writings of Dr. Jonathan Swift, 1752*）、パトリック・ディレイニ『ジョ

ナサン・スウィフト博士の生涯と著作に関するオラリ伯の評言についての所見』(Patrick Delany, *Observations upon Lord Orrery's Remarks on the Life and Writings of Dr. Jonathan Swift*, 1754), ディーン・スウィフト『ジョナサン・スウィフト博士の生涯, 著作, 性格に関する試論』(Deane Swift, *An Essay upon the Life, Writings and Character of Dr. Jonathan Swift*, 1755) 等の既存の伝記的記述を編集し, それに注釈を加える形でスウィフトの生涯を語るものであった。ホークスワース版は, それぞれのエピソードがどの文献から取られたものかをテキスト脇に頁数とともに明記することによって出典が容易に確認できるように作られていて, 研究者にとっても非常に便利なものである。ジョンソンは基本的にはこのホークスワース版に依拠しつつ, 他の伝記の記述を取捨選択しながら, ジョンソン流に書き換えてスウィフトの生涯を再構成していったのである。

『ランブラー』(*The Rambler*) 60号(1750年10月13日)においてジョンソンは伝記執筆について論じ, 「自分の仕事の何たるかをあまり知らず, 非常に無頓着に書いているように見える作家によって, 伝記が書かれることはよくあることである」として, 出来事を年代順に並べるだけの自称伝記作家を批判している。ジョンソンによれば, 伝記執筆の際には日常の詳細な事実の中から「最も重要なものを選択する」(to select the most important) という入念な作業が必要なのである(322)。そうであるとすれば, 網羅的なホークスワースの記述の取捨選択作業の中にこそ, ジョンソンの伝記作家としての文学的手腕が発揮されていると言えるのではないか。本稿ではその編集作業によってジョンソンが『スウィフト伝』において何を提示しようとしたのかを考えたい。

3. スウィフトの「生き様」

まず, ジョンソンの『スウィフト伝』の前半部分の記述において何が強調されているかを, ホークスワース版と比較しつつ考えたい。スウィフトをアイルランド人とするかイングランド人とするかは, 初期の伝記作家たちの焦点の一つであった(Cook xxx)が, ホークスワース版も, 始めにスウィフト生誕までのスウィフト家の事情について詳しく説明し, 作家の出生地としてダブリンとレスターという2つの可能性を示している。これに対してジョンソンは出生に関する詳しい説明はほとんど切り捨て, スウィフトが抱いていたと思われる劣等感を直撃する。

生涯, 彼の生誕地ははっきりしなかった。アイルランド人にはアイルランド人と呼ばれることに満足していたが, ときに自分のことをイングランド人と呼んだ。この問題は彼自身が進んでそうしようとしたように, 不明なままにしておいても, それほど遺憾ではあるまい。(189)

ここでは, アイルランド生まれを恥じたスウィフトが, それをごまかすために意図的に出生地を明確にせず経歴詐称工作を行っていたかのような印象が作り出されている。その上でジョンソンは, 次の段落で「生まれはどうあれ, 彼の受けた教育はアイルランドのものだった」(189)と記し, いずれにしてもスウィフトの文化的出自はアイルランドであると, スウィフトの劣等感をえぐるかのように駄目押しするのである。『スウィフト伝』の記述からまず初めに浮かび上がってくるのは, 出身地を恥じ, それを曖昧にしようとして苦闘する哀れな男の姿である。

大学時代の勉学の話題に移っても, ジョンソンはスウィフトの恥辱を暴露する。

大学の勉学において彼は勤勉でなかったか、要領が悪かったかのどちらかである。あらゆる読者の期待を裏切るだろうが、彼が通常の時期に文学士の学位を請求したとき、正式に認定するには著しく能力を欠いていると試験官たちに判断されたので、最終的には「特別の恩恵」によって学位を得た。この言葉は成績の悪さを示すときにこの大学で使われる言葉である。(189)

ジョンソンはホークスワースにあった大学生生活の記述 (Hawkesworth 4) を省いて、ダブリン大学で学士号を受けたのは「成績の悪さ」(want of merit) を示す「特別の恩恵」(*special favour*) によるものであったという事実だけを残す。「あらゆる読者の期待を裏切るだろうが」という断り書きには、一般的な憶測に反論したいというジョンソンの意図が見える。ジョンソンは才気走ったスウィフト像とは違うものを取えて提示しようとするのである。その次の段落でジョンソンが力をこめて描くのは、ダブリン大学での低評価の汚名をすすごうとしてスウィフトが猛勉強する姿である。

この不面目な結果を彼が大いに恥じたことは容易に想像できるが、恥辱は改心するうえで適切な効果をもたらした。そのときから彼は1日に8時間勉強する決心をし、その勤勉さを7年間続け、十分に認められているほどの向上が見られた。彼の経歴のこの部分は記憶に十分値する。情欲や快楽のせいで能力を一时无駄にしまい、人生の一部分を怠惰のせいで失って、絶望のあまり残りの人生を捨ててしまいたい誘惑に駆られる者にとって、この話は有益な訓告や強力な励ましとなりうるからである。(189)

このようにジョンソンはスウィフトを「若いときから豊かな才能を示して世の中を驚かせるような人」(192)ではなく、遅咲きの努力の人として提示する。その労苦をジョンソンは共感を持って語り、詩人の人生に起こったことを特殊なこととせず、誰にも起こりうることとして一般化している。このようなコメントはホークスワースにはなく、ジョンソンが新たに付け加えたものである。『スウィフト伝』において、スウィフトは天才としてではなく、劣等感を振り払おうとして苦闘する凡人として立ち現れるのである。

ジョンソンの描くスウィフトのその後の人生も挫折と敗北感に満ちている。何度も描かれるのは、出世のために奮闘するものの挫折する姿である。すでに述べたように、詩人になることを望んだ若きスウィフトがドライデンに詩の才能を否定されたことは伝記の最初の方に書かれていた。その後も、パークリー伯爵 (Charles Berkeley, 2nd Earl of Berkeley, 1649-1710) の私設秘書やデリーの主席司祭の職を得ることを期待したのに妨害されてその機会を失ったこと、サー・ウィリアム・テンプル (Sir William Temple, 1628-1699) の後ろ盾を得て出世することを望んだのにテンプルの死によって道が閉ざされたことなど、ジョンソンの描くスウィフトの人生は、期待と失望の繰り返しである。

このようなパターンは、「期待」(expectation) で始まって「嫌悪」(disgust) と「落胆」(disappointment) に終るという、ジョンソンが20年前に『ラセラス』(*The History of Rasselas, Prince of Abissinia*, 1759) で執拗に描いた繰り返しサイクルと一致する。『ラセラス』は「人生に関する実験」(experiments upon life) (44) が行なわれる実験室であり、主人公ラセラスは、イム

ラックらとともに対話のうちに「様々な形の人生の比較」(comparisons of the different forms of life) (122)を行なう。そこで繰り返されるのは、最初は素晴らしく見える一つの「人生の選択」(the choice of life) (31; 122)に期待し希望を抱くものの、その人の人生について詳しく聞くうちに失望し落胆を味わうという「期待と落胆」のパターンである。

『スウィフト伝』においても、立身出世を求めて悪戦苦闘を重ねるものの、希望が叶えられず落胆するというパターンを繰り返すスウィフトの生き様が描かれる。ここで言う「生き様」とは、もちろん「ぶざまな生き方」という本来の意味である。そこにあるのは不遇な天才の生涯ではない。しかもそのようなスウィフトの生き様をジョンソンは「スウィフトは野心によって慌ただしい人生へと駆り立てられた」(ambition pressed Swift into a life of bustle) (198)と表現して、その苦悶に満ちた生涯を半ば自業自得のものとするのである。

4. 翳られるスウィフトの栄光

しかしながら、スウィフトの人生は、表面的に見ればそれほど悲惨なものではなく、むしろかなり輝かしいものであったと言ってもよい。スウィフトは生涯二度、社会的に見てかなり高い地位に達する。一回目は、イングランドでトーリー内閣の相談役となって権力の中核にいた1710年からの数年間、二回目は『ドレイピア書簡』(*Drapier's Letters*, 1724-1725)を書いた主席司祭としてアイルランドの英雄となった1720年代後半以降の時期である。

しかし、このようなスウィフトの栄光の瞬間をジョンソンは苦しみによって曇らせる。一回目の人生のピークである、イングランドにおけるスウィフトの政治的絶頂期の記述には、殺到する嘆願などによって煩わされる「高位の者の苦しみ」(the misery of greatness) (197)が描きこまれている。『ラセラス』において、イムラックは、高い立場を得た者の苦しみについて語る(*Rasselas* 24)が、ジョンソンは社会的に絶頂期にあるスウィフトが味わったであろう同じような苦しみを描きこむ。嘆願などによって苦しめられるスウィフトの状況を、「一つ地位を与えれば、百人の不満分子と一人の忘恩の徒を作ることになる」(197)というルイ14世の言葉を引き合いに出して描くのである。『サヴェジ伝』(*Life of Savage*)の冒頭で「人間の運命とは概して悲惨である」(the general lot of mankind is misery)と断ずるジョンソンは、「輝かしい地位や優れた能力によって人生の高みに登りつめた者も、低い地位から仰ぎ見てうらやむほどのことはないということとはよくあることである」(3: 120)と指摘するが、スウィフトの人生もその例外ではない。

ジョンソンは、スウィフトの人生の第二のピークも翳らさずにはおかない。『ドレイピア書簡』の成功によって、「アイルランドの擁護者、後援者、指導者として民衆から栄誉を受けた」スウィフトは「もっと多くの富か高い地位を持つ者しか持てないような権力」(203)を手にしたとジョンソンは記すが、そのすぐあとに「しかし、評判を得たことの喜びは、すぐに家の中の苦しみ(domestic misery)によって妨げられた」(203)と書き継いで、作家の表舞台での栄光を、最愛のステラの近づく死によって切り崩す。このように人生の栄光と不幸を対比させることで、ジョンソンはスウィフトの人生を、栄光の絶頂にあるときも、苦痛と悲しみから逃れることのできないものとして提示するのである。

スウィフトの苦悩は彼自身の行いの結果であり自業自得であるとしている面では、ジョンソンの

『スウィフト伝』は先行する伝記であるオラリ伯の『ジョナサン・スウィフト博士の生涯と著作に関する評言』に表面的には似ている。オラリ伯もジョンソンも、この作家を盲目的に称賛することを拒否して脱神話化を図り、スウィフトを欠陥に満ちた普通の人間として描く。しかし、オラリ伯の伝記とジョンソンのものを比較すると、類似点だけでなく相違点も浮かび上がってくる。息子への助言という形で伝記を書いたオラリ伯は、スウィフトの人生を反面教師として反省や戒めのための教訓を引き出そうとした。道徳的かつ暴露的なオラリ伯のスウィフト伝は、人間は情念を注意深く抑制すれば、自分の人生をよりよく操作してぶざまな生き方を避けることができるという、いくぶん楽観的な見解に基づいている。表面的には類似しているもののもっと悲観的なジョンソンの伝記においては、スウィフトの人生はそのような陳腐な教訓など何の役にも立たないところに置かれている。オラリ伯にとって愚かな行為の結果でしかないスウィフトの人生をジョンソンは存在論的な領域に持ち込んだのである。

スウィフト自身は自伝的作品において自らの人生を美化し、神話的イメージを作り出そうとしているし、ホークスワースはしばしばスウィフトを盲目的に賛美する傾向がある。暴露本的で偏見に満ちたオラリ伯による伝記やそれに反論を加えるディレイニのスウィフト弁護の伝記の記述を織り込みつつ、ジョンソンはスウィフト神話を破壊して、生身のスウィフトを引きずり出そうとするのである。

5. スウィフトと「死の想念」

ジョンソン『スウィフト伝』は、スウィフトの「生き様」を描くのみならず、それと表裏一体なものである「死に様」をも最初から書き込んでいる。そこには、スウィフトの慌ただしい生を死が切り崩していくさまが見られる。20歳前後から始まって生涯続くことになった病いについては次のように書かれている。

アイルランドを出発する前に彼は身体の不調を覚えた。それは彼の考えでは果物の食べ過ぎによるものであった。病気の原因というものは一般的にはよくわからないものである。たいいていの少年は果物を食べ過ぎるものだし、食べ過ぎても何ら問題がないこともある。スウィフトの病気は難聴を伴う眩暈で、彼を時々襲ったこの身体の不調は、若い頃から始まり、生涯付きまとい、最後には理性を奪って彼を墓場に送りこんだのであった。(190)

ここにはスウィフトが生涯悩まされる症状（メニエール症候群とされる）である「眩暈」と「難聴」が、最後には彼を「墓場に送りこむ」(sent him to the grave)もの、つまり死に繋がるものであることが示されている。しかも「理性を奪って」(deprived of reason)という言葉を付け足すことによって死に様までが暗示されている。これに相当する部分でホークスワースはこの病気が最終的には「心身の完全な衰弱」(total debility of body and mind)に繋がるというだけで、死のことまでには触れていない(Hawkesworth 5)。

このようにジョンソンの『スウィフト伝』には最初から死の匂いがただよっていて、作品全体の基調を決定するのは死の影である。ジョンソンは、スウィフトの生涯を人の死で区切るかのように

サー・ウィリアム・テンブルの死（1699年）、アン女王の死（1714年）、ヴァネッサの死（1723年）、そしてステラの死（1727年）という四人の重要人物の死を、作家の状況と運勢を悪化させる契機として配置している。

前半でスウィフトの運命を大きく転換させる事件はテンブルとアン女王の死である。国王ウィリアム3世に繋がる強力なコネを持っていたテンブルの死によってスウィフトは昇進の機会を失う。これは政界において立身出世したいという願望の最初の挫折である。また1714年のアン女王の死は、政界におけるスウィフトの死、つまり政治生命の喪失を意味し、アイルランド蟄居の直接の原因となる。そのことが作家の精神に与えた影響をジョンソンは次のように描く。

スウィフトは今や大いに意に反して生涯アイルランド人として過ごし始め、流刑の身であると思っている国でどうやったら一番うまく受け入れられるかを考えることになった。最初に彼が抛り所としたのは信仰だったようだ。このころ彼は死の想念に執拗に襲われ、目を覚ますとその思いにとらわれることが長年続いた。(200)

意に反して生涯アイルランド人となることを余儀なくされたスウィフトの頭をよぎるのは「死の想念」(the thoughts of death)である。アイルランドでの「生」は、まるでスウィフトにとって「死」であるかのように、ジョンソンはイングランドでの地位失墜と「死の想念」を結びつける。ホークスワースによる『スウィフト伝』のこれに相当する部分には、アイルランド追放の際のスウィフトの感情を説明するために、人間の「死ぬべき運命」(mortality)と「人生の短さ」(brevery of life)を悟る時期についての一般論が一段落に渡って書かれているが(Hawkesworth 17)、ジョンソンはそれを「死の想念」の一言にまとめて詩人のアイルランド生活に「死」を刻印したのである。

アイルランドでの生活を描いた後半では、二人の女性ヴァネッサとステラの死によってスウィフトがいかに苦しんだかが描かれる。本稿冒頭で示したように、ヴァネッサの遺言によって出版された詩『カデナスとヴァネッサ』は二人の恋愛関係を広く知らせ、スウィフトとステラを悩ませた。スウィフトの二度目の人生のピークを翳らせたステラの死については次のように書かれている。

彼は悲しみの家に戻った。瀕死のステラは墓場へと沈みつつあり、2か月ほど弱り衰えたのち、1728年1月28日に44歳でなくなった。彼女が生きながらえることをどれほど彼が願ったかは、彼の書いたものを見ればわかる。また最愛の人の死を恐れ、それを早めたのは自分自身であるという意識に苛まれていたことは間違いない。(204)

別のところで、ステラは「彼の横暴の下で死んだ」(205)と書くジョンソンは、ここでもステラの死の原因は自分にあるという意識によっていっそう苦しみを増すスウィフトの業の深さを示す。

6. スウィフトの「死に様」

ジョンソンは、スウィフトが心神喪失によって禁治産者となったことを述べたのち、詩人の最期、つまり「死に様」を次のように記している。各段落の頭の番号は筆者が付けた『スウィフト伝』全

段落の通し番号である。

[107] 次の年（1742年）彼の左目は炎症を起こし、他の部分の腫れ物とともに、目は卵大にまで腫れた。痛みのために彼は長い間眠れず、自分の目を掻きえぐろうとするのを、付き添いが5人がかりでやっと押しとどめたほどであった。

[108] やっと目の腫れが引くと、短い間ではあったが理性が戻ってきて、医者と家族を認識できるようになり、回復を期待させた。しかし、数日後、意識がない嗜眠性痴呆へと沈み込み、動かず、反応せず、言葉もなくなった。ただし1年間の完全な沈黙の後、11月30日に家政婦が、お誕生日を祝うために例年のように焚火と灯火装飾の準備がされています、と言ったとき、彼は「実に馬鹿げている。放っておいてくれればいいのに」と答えた、と言われている。

[109] その後も時々彼が話したり何か意味のあるようなことを言ったりしたことは記憶されているが、ついに完全な沈黙に沈み込み、その状態がずっと続いて、1744年10月末ごろ78歳で彼は静かに息を引き取った。（207-08）

ここにあるのは、固有の人間である「スウィフト」の死というよりも、一人の人間の極限状況であり、一人の詩人が詩人の命とも言える言葉を失っていく死の風景である。ジョンソンは「沈む」(sunk)という言葉の繰り返し使って、詩人が生ける屍という物質へと変化していくさまを容赦なく曝け出す。沈んで行く先は「動かず、反応せず、言葉もない」(motionless, heedless, and speechless),「完全な沈黙」(perfect silence)である。第108段落の後半に置かれた誕生日のエピソードは、この人間がアイルランドの英雄であったことを思い出させるが、そのような過去の栄光は、言葉を失って沈黙へと沈み行く現在の詩人の姿とは無関係なものとして追いやられる。

ジョンソンによるスウィフトの死に様の描写の特徴は、ジョンソンが依拠したホークスワースによる伝記の記述との比較によってより明らかになると思われるので、少々長くなるが、ジョンソンの編集作業の現場に立ち会うために引用したい。上記引用のジョンソンの第107～109段落は、ホークスワース版の第152～158段落に相当する。下線は筆者によるもので、ジョンソンの利用した箇所である。各段落の頭の番号は筆者の付けたホークスワース版全段落の通し番号である。

[152] この錯乱が数か月続いたあと、1742年10月に彼の左目は卵大にまで膨れ上がり、 瞼はひどい炎症を起こし変色したように見えたので外科医は瘻疔にかかると恐れた。 腕や胴体にも腫れ物がいくつも出てきた。 この腫れ物の激しい痛みのせいで彼は1か月近く眠ることができず、自分の目を掻きえぐろうとするのを5人の人間が力づくでやっとのことで押さえ込むような状態が1週間続いた。

[153] 理性を奪っているものから精神が引き離されるせいか、あるいは他の原因によるものかわからないが、肉体的痛みのおかげで狂人が理性の力を取り戻すということがある。 痛みは主席司祭にこの効果を大いにもたらした。 というのは、腫瘍が完治して痛みが引く前に、彼はホワイトウェイ夫人を認識できるようになり、彼女の手を取って、昔のように優しく彼女に話しかけたからである。 その日とその次の日には彼は医師や外科医や家族全員を認識できるようになり、 それほど理解力と気分が回復したように見えたので、外科医は、もう一度人と交

わって、旧友たちとの付き合いを楽しむことができるのではないかという望みを持たないでもなかった。しかしこの望みは長くは続かなかった。その数日後から完全な無感覚の状態に沈み込んでよく眠り、部屋の中を歩くようにと言ってもそれが非常に困難になったからである。これはまた別の肉体的疾病の結果で、彼の脳には水が溜まっていた。ダブリンの利口な牧師ステューヴンズ氏は、これは自分の病気のときにも起こった症状であると言い、切開してみれば彼が間違っていないことがわかるように思われた。しかし穿頭して水を出すようステューヴンズ氏が主席司祭の友人や医師に何度も懇願したにもかかわらず、誰も彼の意見や懇願に耳を貸さなかった。

[154] 主席司祭が処置しようのない痴呆状態の中で丸一年間沈黙し続けたのち、11月30日朝に家政婦が彼の部屋に行って、今日はお誕生日なのでお祝いのために例年のように焚火と灯火装飾の準備がされていますと言った。これに対して彼はすぐに、実に馬鹿げている、放っておいてくれればいいのに、と答えた。

[155] 彼の狂気が最終的に昏睡状態へと変わったのちにも、短い合間に感覚と理性が戻るものがあったということは、彼の身体の不調は、それが何であるにせよ、彼の知力を破壊したのではなく、一時停止させているだけだということを示しているようである。

[156] 時々親戚のディーン・スウィフト氏が訪問してきた。1743年のクリスマスの頃、彼はスウィフト氏と話したそうに見えたので、晩御飯を一緒に食べるために来たとスウィフト氏が言ったところ、家政婦のリッジウェイ夫人がすぐに「スウィフトさんにワインを一杯お出ししますか」と言った。彼は返答しなかったが、質問の意味を理解したことを示すために肩をすくめた。それは友人と一緒に夕べを過ごしてほしいときに彼がよくしていた仕草で、「君はワインで私をつぶすつもりだね」と言っているのと同じであった。しばらくして彼は再び苦勞して言葉を見つけようとしたが、何度も試みたものの結局無理だとわかって、深いため息をつき、その後は黙ってしまった。数か月後、彼がナイフを手に取りろうとしたので、家政婦がそれを取り上げようとする、彼は肩をすくめて「これが私だ、これが私だ」と言って、5、6分後に同じ言葉を2、3回繰り返した。

[157] 1744年に彼は時々下男の名を呼び、あるときには話しかけようとしたが、言いたいことを言葉にすることができず、困ったようなそぶりをして、最後に「私は馬鹿者だ」と言った。のちにあるとき、下男が彼の時計を持ち去ろうとしたとき、彼は「それをこっちに持って来てくれ」と言った。また同じ下男が大きくて硬い石炭を割ろうとしていたときには「それは石だ、馬鹿者め」と言った。

[158] これ以降はまったく話さなくなり、1745年10月末ごろ、苦しみもせず発作も起こさずに78歳で亡くなった。(Hawkesworth 30-31)

二つの死の場面を並べてみると、目の炎症に関するジョンソンの記述は、ホークスワースの第152段落を簡略化したものであることがわかる。ホークスワースは、第153段落でその目の炎症の痛みが理性を一時回復させる様子や、症状に関してステューヴンズが意見したことなどを事細かに説明しているが、ジョンソンはそれを第108段落前半で二つの文に要約し、誕生日の式典について書かれたホークスワースの第154段落を短くパラフレーズしたものを同じ段落の後半に置いている。

ホークスワースは、意識が断続的に回復したことを告げて、外部刺激に対するスウィフトの反応を（1）11月30日の誕生日の式典、（2）ディーン・スウィフトの訪問、（3）家政婦がナイフを取り上げたこと、（4）下男とのやりとり、という4つのエピソードを紹介しつつ、2つの段落（第156-157段落）に渡って記述しているが、ジョンソンは（1）以外のエピソードをすべて切り捨てて、「その後も時々彼が話したり何か意味があるようなことを言ったりしたことは記憶されている」という一文にまとめた上でスウィフトの最期を簡潔に述べている。

ここからわかるように、ジョンソンはホークスワースの記述に見られる詳細を削除し言葉を切り詰めてスウィフトの死を描写している。ジョンソンの凝縮作業の一つの特徴は、なるべく周囲の人間を描きこまず、固有名詞や詳細な状況の描写を省略して、スウィフトの死を普遍化して誰にでも起こりうることのように見せること、つまり一人の人間の典型的な死に昇華させることである。

ジョンソンのこの引用を読むだけで、読者はジョンソン版が「不当」とはほど遠いことがわかるだろう。ジョンソンはスウィフトの痴呆性をことさらに強調したりはしていない。もし彼が作家の老衰と狂気を強調するつもりだったなら、省略されたエピソードは完璧な例となっただろう。一つを除いてすべてを省略することにしたことから、彼の意図がスウィフトを貶めることにあったのではないことは明らかである。

瀕死のスウィフトのエピソードからジョンソンを選んだのは、彼の誕生日の焚火と灯火装飾に関するものだけだった。彼が『ランブラー』60号で述べているように、日常の詳細な事実の中から「最も重要なものを選択する」ことが優れた伝記作家であるための鍵であるとすれば、彼はこの11月30日のエピソードが最も重要であると考えたのである。ジョンソンはなぜこれを選んだのか。このエピソードの特徴は、切り捨てられた他のものとは違って、過去のスウィフトが侵入してくることである。そこでは公に認められたスウィフトの栄光の姿と極限状況にある現在の私的なスウィフトの姿が対比された上で、その二つが無関係であること、つまりスウィフトという人間存在が時間を越えた同一性を保持し得ないことが強調される。このエピソードは人間存在の無常性を示すのに最適のものだったのである。

『スウィフト伝』執筆時点で70歳前後のジョンソンも死を意識しているであろうことは容易に想像できるが、『詩人伝』より30年ほど前に書かれた詩『人間の願望の虚しさ』（*The Vanity of Human Wishes*, 1749）においてもジョンソンはスウィフトの死に様を例として同じように無常観を説いていた。

人生の最後の局面ではどんな椿事に見舞われることだろう。

勇者が怖がったり賢者が呆けたりするのだ。

モルバラの目からは毫碌の涙が流れ、

スウィフトはよだれを垂らし見世物として息絶える⁽³⁾。(315-18)

この詩はここに至るまでトマス・ウルジー（Thomas Wolsey, 1475? -1530）やウィリアム・ロー

(3) *The Poems of Samuel Johnson*, eds. David Nichol Smith and Edward L. McAdam (Oxford: Clarendon, 1962): 45. 引用の後に行数を示す。

ド (William Laud, 1573-1645) などの例を挙げて、富や権力を手にした者の運命の変転を説いてきたが、上記の引用はそのような栄枯盛衰を凝縮して典型化したヴァリエーションである。ここでは勇者モルバラ (John Churchill, 1st Duke of Marlborough, 1650-1722) は醜い老人として涙を流し、賢者スウィフトは生理的現象を隠さない獣のような存在として見世物になってぶざまな死を遂げる。優れた知性の持ち主が人間からモノへと腐敗していく様子を描くジョンソンは、死にゆくスウィフトを「賢者の痴呆」の例として取り上げ、人間の人生のはかなさを痛感させるのである。

ジョンソンがスウィフトに対して抱くイメージは30年前のものとはほとんど変化していない。『人間の願望の虚しさ』と同様に『スウィフト伝』においてもジョンソンはスウィフトの栄光と末路を対比させて人間の無常を表す典型例として描いている。それによって強調されるのは、常に流動変化せざるをえない人間存在の悲しみであり、誕生日のエピソードはそれを示すのに最適であったと言える。

7. 結語

本稿で最初に確認したように、ジョンソンの『スウィフト伝』の主眼は、詩人の作品と業績を批評して英国詩人の伝統の流れの中に位置づけることではない。既成のスウィフトの伝記、特にホークスワースのものを凝縮するような形で自分版のスウィフト像を作り上げていくジョンソンの編集作業は、スウィフトの人生を挫折と苦闘の連続として描き出す。そこに見られるのは、自分の生を理性によって選択し統御していくような能動的な生き方ではなく、自らの業や外的要因によって苦しみを蒙り続けるパトス、つまり受難としての人生である。またそこに見られるスウィフトの死に様は、詩人がロゴス、つまり言葉と理性を失って、自分の心身の動きさえ掌握不能となり、沈黙つまり言葉のない世界へと沈んで屍と化していくさまである。ジョンソンはスウィフトの人生を詩人になりそこなった一人の人間の生き様と死に様の一つの典型へと昇華させているのである。

このような人生観は、ジョンソンが他の作品、例えば『ラセラス』や『人間の願望の虚しさ』で示唆したものと一致する。「人生の選択」の可能性を模索するラセラスは、どのような選択をしたところで人間は期待したほどの幸福を得られないと落胆する。また『人間の願望の虚しさ』においてジョンソンは、流転変化せざるをえない人間の悲しみを提示していた。『スウィフト伝』は、どんな選択をしても結局苦しみや悲しみなしでは済まされない人生のありさまを描き出すことによって、自力では救いを得られない人間の存在自体が悲哀に満ちていること、すなわち有の悲しみを浮き彫りにするのである。それは人間性の負の部分を描き続けたスウィフトに手向けるにふさわしい鎮魂歌だったと言えるのではないか。

参考文献

- Boswell, James. *Life of Johnson*. Ed. R. W. Chapman. Oxford, 1998.
- Boyle, John, Early of Orrery. *Remarks on the Life and Writings of Dr. Jonathan Swift [1752] (Swiftiana 11)*. New York: Garland, 1974.
- Cook, Daniel, ed. *The Lives of Jonathan Swift*. London and New York: Routledge, 2011.
- Grundy, Isobel. "Swift and Johnson." *The Age of Johnson: A Scholarly Annual* 2 (1989): 154-80.

- Hawkesworth, John. *An Account of the Life of the Reverend Jonathan Swift, D.D., Dean of St. Patrick's, Dublin* [1755]. *Three Biographical Pamphlets, 1745–1758* (Swiftiana 11). New York: Garland, 1975.
- Hilles, Frederick W. "Dr. Johnson on Swift's Last Years: Some Misconceptions and Distortions." *Philological Quarterly* 54 (1975): 370–79.
- Johnson, Samuel. *The Lives of the Most Eminent English Poets, with Critical Observations on Their Works*. Ed. Roger Lonsdale. 4 vols. Oxford: Clarendon, 2006.
- . *The Rambler*. Eds. W. J. Bate and Albrecht B. Strauss. New Haven and London: Yale UP, 1969.
- . *The History of Rasselas Prince of Abissinia*. Ed. J. R. Hardy. Oxford: Oxford UP, 1988.
- . *The Poems of Samuel Johnson*. Eds. David Nichol Smith and Edward L. Mcadam. Oxford: Clarendon, 1962.
- Keilen, S. P. T. "Johnsonian Biography and the Swiftian Self." *Cambridge Quarterly* 23, 4 (1994): 324–47.
- Korshin, Paul J. "Johnson and Swift: A Study in the Genesis of Literary Opinion." *Philological Quarterly* 48 (1969): 464–78.
- Maner, Martin. "Johnson's Redaction of Hawkesworth's *Swift*." *The Age of Johnson: A Scholarly Annual* 2 (1989): 311–34.
- Raleigh, Walter. *Six Essays on Johnson*. Oxford: Clarendon, 1927.
- Rawson, Claude. "Lives And Dislikes: Johnson's *Lives of the Poets*." *Eighteenth-Century Studies* 40, 1 (2006): 109–48.
- Richman, Jordan. "Subjectivity in the Art of Eighteenth Century Biography: Johnson's Portrait of Swift." *Enlightenment Essays* 2 (1971): 91–102.
- Sheridan, Thomas. "The Life of Doctor Swift." *The Works of the Rev. Dr. Jonathan Swift, D. D., Dean of St. Patrick's, Dublin*. Ed. John Nichols. London, 1801: 1, 495–512.
- Swift, Deane. *An Essay upon the Life, Writings & Character of Dr Jonathan Swift* [1755] (Swiftiana 14). New York: Garland, 1974.
- Watkins, W. B. C. *Perilous Balance: The Tragic Genius of Swift, Johnson, and Stern*. Cambridge: Walker-de-Berry, 1960.
- Williams, Harold. "Swift's Early Biographers." *Pope and His Contemporaries: Essays presented to George Shelburne*. Eds. James L. Clifford and Louis A. Landa. Oxford: Clarendon, 1949: 114–28.
- ジョンソン, サミュエル『イギリス詩人伝』小林章夫他訳, 筑摩書房, 2009 年。
- 渡邊孔二『スウィフトの文学的技法』京都修学社, 2003 年。

The Sorrow of Being: On Samuel Johnson's *Life of Swift*

Toru Nishiyama